

パリハカ

－非暴力・不服従抵抗運動の地－

向井 考史

パリハカとは、1850年代半ばからニュージーランドで起こった、英国植民地政府に対するマオリ人の一連の解放運動の中で、テ・フィティ・オ・ロンゴマイとトフ・カーカヒによって建設されたマオリ解放村の名である。

1.1 前史

1840年2月6日、英国政府はニュージーランドを植民地化するために、3箇条からなるワイタング条約（文言化されていない「信教の自由」があるため、実際には4箇条）を先住民族であるマオリ人との間で締結した。この条約には英語版とマオリ語版の二つの本文があり、その間に齟齬があった。

英語版の第1条は、マオリ人の領域に対する英国女王の「主権」(sovereignty)を定めているが、マオリ語版では“te kawanatanga katoa” (the complete governance「完全なる支配」) という、「主権」よりも弱い表現になっている。“kawanatanga”は“governance”の音訳であり、マオリ人にはその意味が理解できなかったであろう。

第2条は、マオリの部族長に対する権利の保障であるが、英語版では、“Maori leaders and people …were confirmed in and guaranteed exclusive and undisturbed possession of their lands …”となっているのに対して、マオリ語版では“exclusive and undisturbed possession”を“te tino rangatiratanga” (the absolute chieftainship = sovereignty) と訳している。

すなわち、英語本文の第1条は、マオリ人の領域に対する英国女王の「主権」を定め、マオリ語本文の第2条は、土地、森林、漁場、財産に対するマオリ人の「主権」を定めていることになる。この齟齬が、マオリ人と英国植民地政府との間に軋轢を生み出すこととなる。

更に、第2条の後半部分の“The Chiefs of the United Tribes and the individual Chiefs yield to Her Majesty the exclusive right of Preemption over such lands as the proprietors thereof may be disposed to alienate at such prices as may be agreed upon between the respective Proprietors and persons appointed by Her Majesty to treat with them in that behalf.”

(「連合部族の部族長達あるいは部族長個人は、土地の専売権を女王陛下に排他的に譲渡することとし、土地の譲渡処分に際して所有者は、その価格について女王陛下によって任命されたものとの間で同意しなければならない」〈私訳〉)という規定も、後に土地を巡る紛争の原因となった。

1845年、ワイタンギ条約に最初に署名をしたプヒ族のホネ・ヘケが、所有地のカウリの木を伐採したところ植民地政府から処罰を受ける。この事以前に、条約締結時にオキアトがラッセルと改名されて首都と定められたにもかかわらず、1年後に首都がオークランドに移され、このため北部部族に交易による利がもたらされなくなったことに不満を抱いていたヘケは、コロラレカ（現ラッセル）の丘に立てられていた英国国旗掲揚のためのポールを、少なくとも4回に亘って切り倒した。この事がきっかけとなって、ヘケの部族と植民地政府の間に戦争が起こり（ノースランド戦争）、1年後にヘケは降伏する。その結果、ヘケの土地は没収されることになる。

1.2 マオリ預言者の出現

ホネ・ヘケの従軍祭司として戦争に参加したパパフリヒアは、英国国教会が最初の宣教拠点としたランギホウアに開設したミッションスクールに学び、一時はキリスト教の神を受け入れたらしいが、やがては宣教師達を「裏切り者の侵略者」と呼んで憎しみを抱くようになった。特に、ホネ・ヘケの土地が植民地政府によって収奪される様を見てパパフリヒアは、マオリはやがて旧約書のイスラエルのように、パケハ（白人）によって土地を奪われ、パケハの奴隷となる運命にあると預言すると共に、旧約書に登場する「火の蛇」（民数記21章）をシンボルとした宗教信仰を創始する。

ノースランド戦争をきっかけとして起こった、植民地政府によるマオリ人の土地の不法な収奪が続く中で、パパフリヒアのように、一度はキリスト教に改宗しながら、新約書（ヨハネ黙示録を除く）とイエス・キリストへの信仰を捨て、旧約書をマオリ解放思想の根拠とする反植民地抵抗運動を展開する人々が現れる。彼らは「マオリ預言者」と呼ばれ、その数は80人を超えるとされている。代表的な預言者として、1860年に第2代マオリ王として即位し、タリアオ信仰を創始したポータタウ・テ・フェロフェロII・タフィアオ、パイ・マリレ（善なる平和）運動を起こし、自らをアブラハムと呼んだテ・ウア・ハウメネ、流刑地チャタム島から輸送船を奪って脱出し、本国に戻った事を出エジプトとし、自らをモーセと呼んでリングアツ信仰を起こしたテ・アリアランギ・テ・コーティ、イハライラ（イスラエル）運動を起こし、人里離れたテ・ウレウェラ山地のマウンガポハツに、イザヤ書やモーセの律法に基づいた解放村ヒルハラマ（エルサレム）を造ったルア・ケナーナ（意味は「第2のカナン」）、

12 本の大木を伐採して山から川に流し、それらを柱として海岸に壮大な神殿を建てるというコヒティタンガ・マラマー運動を起こしたが、神殿建設には至らなかったテ・マテンガ・タマティ、ラターナ村を建設したウィレム・ラターナ、などを挙げる事が出来る。

ニュージーランドの富士山と呼ばれるタラナキ（英名 Mt. Egmont）のタスマン海側山麓にパリハカ村を建設したテ・フィティ・オ・ロンゴマイも、その一人である。

1.3 タラナキ戦争、ワイカト戦争

1800 年代の半ばを過ぎると、イギリスからの移民の数は約 59,000 になり、マオリの人口約 56,000 よりも多くなる。土地の需要は非常に高まったが、ワイタンギ条約第 2 条後半の土地譲渡規定への不満から、マオリ諸部族は土地の譲渡を拒むようになる。

1850 年頃から、それまで北部地方を中心に居住していた白人達が、北島南西部のタスマン海沿岸にニュープリムスという集落を造ると、急速に白人居住者が増加して約 2500 人になり、土地の確保が植民地政府にとって緊急の課題となった。政府は彼らのために 1400 エーカーの土地をマオリから買い取ったが、彼らは約 4000 人のマオリが 80 万ヘクタールの土地を保有している事に苛立ちを覚えていた。植民地政府の土地買収弁務官であったドナルド・マックリーンは、タラナキ地方のアティ・アワ族の部族長であったウィレム・キング・テ・ランギターケに対して土地を売るように圧力をかけるが、彼は売却に応じなかった。そこでマックリーンは、部族の一員を抱き込んで、ヒュイ（部族会議）の承認なしに土地を売却させた。このことがきっかけとなって、第 1 次タラナキ戦争が起こるが、勝敗はつかず、植民地政府は土地の確保にも失敗する。

1863 年 3 月から、タラナキ地方でマオリと植民地政府軍との間に土地を巡る小競り合いが頻発し始める。同年に、当時の総督であったグレイは、ワイカトの諸部族がマオリ王を中心として連合し、土地の売却を禁止する決定をした事に対して報復の攻撃を仕掛ける。マオリ諸部族が王を中心とした部族連合政府を創ったことが、英国女王の主権を侵害するものとして懲罰を加えようとしたのである。ワイカト戦争と呼ばれる戦いは翌 64 年にマオリの敗北で終結するが、この最中、植民地政府は 1863 年 12 月に New Zealand Settlement Act 1863 を議会で通過・成立させた。これは、例えば、道路を造るというような名目でマオリの土地に強制立ち入りして測量し、これを阻止しようとする部族の土地を武力によってでも没収するという事を可能にするための法

案であった。この法案が成立した結果、ワイカト諸部族の土地 130 万ヘクタールが没収される。また、第 2 次タラナキ戦争の結果、タラナキ地方のアティ・アワ族は、土地をすべて没収される事になった。

2.1 テ・フィティ・オ・ロンゴマイ（テ・フィティ）

第 2 次タラナキ戦争は 1866 年に終結するが、この混乱と土地の大量没収の中でマオリのための共同村を作り、非暴力・不服従という平和的な抵抗運動を始めたのがテ・フィティとその義理の兄であった トフ・カーカヒであった。その共同村は「パリハカ」と呼ばれて、現在も存続している。

「パリハカ」という名前について、「パリ」は「崖」あるいは「高潮」、「ハカ」は戦闘の際の「踊り」という意味であるものの、名前の由来やそれが象徴することについては分からなくなってしまっている。

テ・フィティは、5 年に亘るタラナキ戦争やワイカト戦争の結果を見て、武器を以て闘っては植民地政府軍には勝てないとして、非暴力、不服従抵抗運動を展開した。非暴力・不服従抵抗運動については、インドのガンジーが有名であるが、テ・フィティはガンジーよりも 70 年早くこの運動を始めている。

テ・フィティは、「武器を捨てよ。賢くあれ。白人達が幹を切り倒しても、根まで引き抜く事は出来ない。土地を貸したり、売ったりする事を止めよ。ヨーロッパ人をマオリの土地に入れてはならない」と言って、マオリの居住地域と白人の居住地域とを区別する分離主義を唱えた。その象徴として、パリハカ村ではヨーロッパから持ち込まれた衣服、食物、農機具、言語など、全てのヨーロッパ式生活様式を排除して、伝統的なマオリの生活様式を復興した。

テ・フィティは、アティ・アワ族の出身で 1820 年頃に生まれている。タラナキ地方のワレアに開校されたライメンシュナイダー・ミッション・スクールで聖書を学ぶ優秀な生徒であった。卒業後ワレアで小麦工場を建てて、小さな村落共同体を造っている。1862 年に郵便貨物船の Lord Worsley がタラナキ地方沿岸で座礁するという事故が起こるが、この時には、乗客・船員を救出し、白人に敵意を持つ周辺のマオリ族から彼らを保護している。それにもかかわらず、植民地政府は 1865 年に彼の村を蹂躪した。その時テ・フィティは、村民に対して武器を取る事を禁じている。その後、テ・フィティは海岸近くからタラナキ山の麓へと移り住んで 1866 年からパリハカ村の建設に従事する。

彼はキングタンガ（マオリ王運動）の協賛者であり、マオリ民族主義者であり、タラナキ戦争やワイカト戦争で植民地政府から手配された者を保護する活動をしたが、

彼自身は戦争には加わらず、生涯を平和主義者として送っている。

マオリ預言者の多くが、旧約書に基づく新しい宗教信仰を創設する中で、テ・フィティ自身は新しい宗教信仰を創設してはいない。しかしながら、パリハカ運動は宗教的な色彩を強く帯びている。彼は、その当時のマオリ人の多くが洗礼名を捨ててマオリ名を名乗ったように、「エルエティ」(Edward のマオリ語読み)を捨てて、本名のテ・フィティ・オ・ロンゴマイに戻している。しかし、聖書全体までも捨てた訳ではなく、新約聖書とイエス・キリストへの信仰を捨てて、旧約書の選民思想を生涯持ち続けた。すなわち、テ・フィティは、マオリを選民イスラエルと同一視した。かつてエジプトで奴隷であったイスラエルをエホバ(ヤハウェ)が解放し、カナンの土地へと導いたように、マオリをも白人の手から解放して、先祖の土地を回復して下さると人々に教えた。彼は、パリハカの村民を統率するために、イスラエルの 12 部族に因んで、集まってきた諸部族から 12 人の指導者を選んでいる。

1700 年代の終わりに白人が移住して来てから 60 年程の間に、白人が持ち込んだマスケット銃を用いた部族間抗争(マスケット戦争)による戦死者の激増、白人が持ち込んだハシカや疱瘡、インフルエンザなどの感染症による死者の増加、更には植民地政府軍との土地を巡る戦争による死者の激増により、マオリの人口は激減していたが、植民地政府は、マオリはやがては滅びるべき民族として、保護政策を全く採らなかった。

マオリ人口の激減という現実の中で、テ・フィティは、マオリは旧約書のイザヤが預言した「残りの者」であると考えたことから、パリハカ村では、イザヤ書を始め預言書が朗唱された。例えば、イザヤ書 60:20 - 22 は、マオリの伝統的なポイ・ダンスの旋律で歌われ、これは現在でもパリハカ村で歌われている。

あなたの太陽は再び没せず、あなたの月はかけることがない。主がとこしえにあなたの光となり、あなたの悲しみの日が終るからである。

あなたの民はことごとく正しい者となって、とこしえに地を所有する。彼らはわたしの植えた若枝、わが手のわざ、わが栄光をあらわすものとなる。

その最も小さい者は氏族となり、その最も弱い者は強い国となる。わたしは主である。

その時がくるならば、すみやかにこの事をなす。

しかし、このような歌が歌われていたからと言って、パリハカ共同体に宗教制度や教会、あるいは礼拝があった訳ではない。祈りも捧げられることはなかった。テ・フィティによれば、「祈りには何の効果もないし、何の結果ももたらさない。祈ったから

と言って、利益がある訳ではないし、癒される訳でもない。祈る人にも、祈らない人にも、雨は同じように降る」のである。それにもかかわらず旧約書が読まれたのは、それを通してマオリのアイデンティティが確認されるためであった。

2.2 諸事件の発生

テ・フィティの旧約書に基づく共同体作りは、タラナキ地方だけではなく、北島、南島全土に知られるようになり、大きな影響力を与えた。彼が南島のダニーデンを訪れた時、彼の働きを知っていたユダヤ教のラビが、律法の書（モーセ五書）の古い写本があるから見に来るようにと招いたが、彼は健康を理由にしてこれを断っている。テ・フィティの関心が旧約書に基づく宗教信仰にあったのではなく、旧約書に記されている解放思想にあったからであろう。この事はテ・フィティ自身の言葉からも明らかである。彼は、「真のキリストはいない。けれどもヴィクトリア女王も真のキリストになりうる。もし彼女がマオリを軛から解放するなら」と言っている。

テ・フィティの思想の中には、彼以前のマオリ預言者達と同様に、千年王国思想（ただし、マオリ預言者の場合には、キリストの再臨は伴わない）もあった。しかし、彼以前の預言者達が、千年王国が到来する時には白人の支配が打ち破られ、ニュージーランドから白人がいなくなって、マオリの土地が全て回復されるとしたのに対して、テ・フィティにとっての千年王国とは、マオリと白人が互いに境界を越えることなく、干渉することなく、平和的に共存する世界の到来であった。ここでもまた、テ・フィティはイザヤ書を引き合いに出している。

おおかみは小羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏し、子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて、小さいわらべに導かれ、雌牛と熊とは食い物を共にし、牛の子と熊の子と共に伏し、ししは牛のようにわらを食い、乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ、乳離れの子は手をまむしの穴に入れる。（イザヤ 11：9 以下）

オオカミ、ヒョウ、若じし、熊、毒蛇、マムシは白人を象徴し、子羊、子やぎ、子牛、乳飲み子はマオリを象徴している。テ・フィティの言う千年王国は、これらが共に住むことの出来る世界の到来である。

けれども、テ・フィティの期待したような千年王国の到来は、少なくとも彼の時代にはなかった。それどころか、テ・フィティとトフは逮捕、収監され、パリハカ村は植民地政府によって不法な土地収奪を受けることになる。

1868 年にタラナキ地方のルアヌイ族の部族長であったティトコワルが、彼の土地への白人の侵入を防ぐために、周辺の白人移住民と政府軍を急襲する。この戦闘は 9 ヶ月続くが、この間テ・フィティは中立を保っていた。この戦闘によって、移住していた白人が土地を放棄したため、タラナキの土地の大部分は、タラナキ戦争の結果植民地政府が没収した土地として登記されていたにもかかわらず、マオリがそれらの土地を使用することになった。

1870 年頃にはパリハカ村の人口は 300 人を超え、1871 年に村の医療調査に入ったタラナキ地方の医務官は、村の調理設備が整っており、食料が豊富で村民の栄養状態が良く、病気も発生していない、全国で最も清潔なマオリ集落である、と報告している。

1870 年代の終わりには村の人口は 1500 を超え、最も繁栄しているマオリ村となった。村造りの初期においては西洋式の生活様式を禁じたテ・フィティも、この頃にはマオリにとって有用な西洋文明を取り入れ、製粉所、製パン所、銀行、商業施設が造られ、農機具なども先端の物が備えられていた。

1879 年に植民地政府は、1868 年のティトコワルの反乱によって失った土地をマオリから買い戻そうとした。買い戻そうとした土地には、タラナキ戦争で没収した土地の代替地として政府が指定した保留地も含まれており、その保留地にパリハカ村があった。

1879 年 5 月に植民地政府の測量隊が測量を始めた時、テ・フィティは測量のための杭を引き抜き、張られたフェンスを取り除いて畑を耕すように村民に指示する。これは「農夫事件」(Ploughmen) と呼ばれている。1 ヶ月後に武装警官隊が農夫達を逮捕し始め、毎日数十人が逮捕されたが、次から次へと農夫が現れ、測量隊の打ち込む杭を引き抜いてはそこを耕し続けた。8 月までには 200 人の逮捕者が出、タラナキの刑務所には収監しきれず、ウェリントンの仮設収容所に送られた。

1879 年 8 月 10 に、植民地政府寄りのマオリ部族長達 10 人が、植民地政府に対して測量を中止するよう要請し、同時にマオリに対しては抵抗運動を止めて、土地の没収が合法であるのかどうかを最高裁判所の判断に委ねてはどうかという提案をし、テ・フィティがこれを受け入れて、農夫事件は終熄した。

1880 年になると、植民地政府はパリハカ村の耕作地に道路を通そうとする。これに対してテ・フィティは、フェンスを張り、土を耕し、麦の種を蒔いて抵抗する。測量隊がフェンスを取り除くとすぐにフェンスを張るという抵抗を繰り返す(フェンス事件)。逮捕される時には決して抵抗しないで、無言で逮捕されるという事が繰り返される。収監される者が増え続け、多人数を収容した刑務所の環境悪化による病人の増加や収監費用の増大などから、植民地政府は逮捕することを諦めざるを得なくなった。

1881年に武装警官隊と志願兵が突然パリハカ村に押し入る。官憲が村の入り口で待機している時、テ・フィティは村民に対して決して抵抗しないこと、子供達は列を作って歌とスティックダンスで侵入者を迎えることを命じ、村民はそれに従った。

この年、植民地政府は The West Coast Preservation Act を発布し、これが適用されてテ・フィティとトフは逮捕され、裁判を受けることなく2年間オタゴの刑務所に収監される。村民は追い出され、村は閉鎖を余儀なくされる。官憲は、村に残る者がいないように、周辺の耕作地を荒らし、主食であったジャガイモを掘り起こして廃棄した。このため、村から追い出された人々の中には餓死する者も出た。

さらに、翌1882年、The West Coast Peace Preservation Bill が議会を通過し、植民地政府は、これによりテ・フィティとトフ・カーカヒを、裁判なしに刑務所に無期限に収監することを可能にした。

1881年のパリハカ村への侵略の前兆は、これより2年前の1879年にあった。タフ族の部族長マイハロアは、テ・フィティと同じく *passive resistance*（非暴力・不服従抵抗）によって村作りをしていたが、この村に官憲が踏み込み、村民を追い出した。厳しい冬の最中の出来事であり、老人や子供の多くが寒さのために死亡するということが起こっていた。

1884年、刑務所から出所したテ・フィティ、トフを始めとする村民は、再びパリハカで住居を建て始め、タラナキ地方でデモを行って、パリハカを廃村にし、土地を白人に売却した植民地政府に対する抗議運動を展開する。

1886年には、抗議運動に加わった人々は、すでに政府によって売却された土地に住み着いていた白人の農場に掘っ立て小屋を建て始める。テ・フィティとこれに協力したティトコワルは逮捕され、テ・フィティは最高裁判所で罰金100ポンド、懲役3ヶ月の判決を受け、収監される。

1889年にテ・フィティは再び3ヶ月の強制労働と罰金203ポンドを課せられるが、パリハカ村の再建は継続された。トフは1907年2月に死去し、テ・フィティも同年11月18日に死去。

3. パリハカその後

このテ・フィティとトフによってなされた非暴力・不服従抵抗運動はマオリにも白人にもニュージーランドの歴史の中で最も大きな影響を与えた。パリハカでは二人の指導者の死後、毎年3月18日を記念の日として、記念行事を行っていているが、しかし、白人の間では時の経過と共に忘れられていく。

この出来事が再び大きな関心と呼ぶようになったのは、1954年に Dick Scott が “The

Story of Parihaka”を著し、それが 1975 年に“Ask That Mountain”というタイトルで改訂増補されてからである。これが白人の間にマオリに対する同情と謝罪の思いをもたらし、政府に対するパリハカの土地返還嘆願運動へと発展した。

1980 年代にはパリハカを主題とした音楽劇が上演された他、“On That Day”などの音楽も造られている (Kiwi Pacific Records, 1982)。

こういった運動が政府を動かし、2001 年から 2006 年の 5 年間に正式な謝罪と賠償金の支払い、一部の土地の返還がなされた。

現在パリハカでは、3 月 18 日に“Parihaka International Peace Festival”が開催され、多くの人々が訪れる。

キリスト教は、宣教開始当初、宣教師達がヨーロッパ人とマオリ人の交易の仲立ちをしたことによってマオリ村に浸透し、マオリの庇護を受けることになった。その初期においては、北部プヒ族の銃の入手に協力し、その結果、プヒ族は敵対部族に対して優勢となって、ワイタンギ条約締結の中心部族となった。そして、条約に最初に署名を行ったホネ・ヘケが、1845 年に条約の不平等性に気付き、植民地政府に対して反乱を企てたことが、その後のマオリの土地の没収・人権問題へと発展していった。ニュージーランド・マオリの人権問題の端緒がキリスト教宣教にあると言っても過言ではない。

けれども、マオリの人権回復を主導したのもキリスト教会であった。宣教師達の努力があって、例えば、テ・コオティによって設立され、当初は新約聖書とキリスト信仰を拒絶していたリングアツ教会も、1930 年代からキリストの福音を受け入れるようになった。ウィレム・ラターナによって設立されたラターナ教会は、「エホバ・父・子・聖霊そして忠実な天使達」というキリスト教的表現を用いながら、礼拝の中ではイエス・キリストの名を用いないため異端とされていた。これをメソディストとカトリックがキリスト教会として認めて、説教者を派遣するというような和解が進んでいる (英国国教会は現在も認めていない)。現在では、ほぼすべてのマオリ村にキリスト教会が設立され、マオリ人が、彫刻、絵画、音楽などの自己の固有の文化によって、キリスト教信仰を表現するようになっている。

参考文献

- Berich, James: The New Zealand Wars, Penguin Books (NZ) Ltd., 1998
 Calman, Ross: The New Zealand Wars, Reed Books, 2004
 Elsmore, Bronwyn: Like Them That Dream - The Maori and the Old Testament, Reed Books, 1985
 Elsmore, Bronwyn: Mana From Heaven - A Century of Maori Prophets in New Zealand, Reed Books, 1989
 Hohaia, Te Miringa, et.al. ed.: Parihaka - The Art of Passive Resistance, City Gallery Wellington, 2005

- Kawharu, Hugh, Sir ed.: Conflict and Compromise - Essays on the Maori since Colonization, Reed Books, 2003
King, Michael: The Penguin History of New Zealand, Penguin Books (NZ) Ltd., 2003
Moon, Paul: HONE HEKE - Nga Puhi Warrior, David Ling Publishing Ltd., 2001
Orange, Claudia: An Illustrated History of the Treaty of Waitangi, Bridget Williams Books, 2004
Riseborough, Hazel: Days of Darkness – Taranaki 1878-1884, Penguin Books, 2004
Scott, Dick: Ask That Mountain - The Story of Parihaka, Reed Books, 1975
Walker, Rnginui: Ka Whawhai Tonu Matou - Struggle Without End, Penguin Group (NZ), 1990